

第七卷

第十號

子
婦



第七卷第十號目次

投稿募集

一種類

● ふ伽話

本誌半ヶ年分以上三ヶ年分

育児法の誤謬

幼稚園攻撃

一般教育か特殊教育か

ふ伽芝居に就て

鼠族驅除と家屋改造

近視眼の衛生

粘土細工に就て

猿と人間

照天姫

篠田利英

野尻精一

和田實

巖谷小波

井上豊太郎

新免義男

藤五代策

澪の舎主人

硯山

但し右賞品は受賞者の希望に依りて会費と差引き若しくは自ら取
らすして其指定する人に本會より直接送ることを得
一注意 お伽話及一般は記事一行廿二字詰にて半紙又は郵紙に書
かれたし原稿は凡て返戻致しません此募集は期限を定めません毎
月十日迄の分を其月に選評し後は翌月に回はし何時迄も引續いて
行く様りです。

宛名は本會へ直接御送り下さい。
開き封で懸募原稿と標記すれば三十夕迄は郵税二錢で参ります。

質問規定

本會は讀者の種々なる質問に應じます。婦人と子供と家庭とに関する
事なら何でもお尋ねなさい。往復はがきか又は通信料封入ならば早速
に御答します。公衆に有益だと思ふことは誌上で説明します。

入會又ハ購讀手續

本會に御入會なさらうとする方は會費一ヶ月金拾錢の割合で一ヶ月
分をまとめて本會に直接御申込下されば直に登録して雑誌を發送致
します。會員にならずに雑誌支け讀みたい方は左の割合の前金で本會
か又は販賣書店へ御便宜御申込下さい。

- 一冊郵稅共金拾一錢
- 六冊前金郵稅共六拾錢
- 捨二冊同金壹圓私拾錢
- 郵券代用一割増

會 告

來る十月十二日午後二時より麻布區飯倉
町麻布幼稚園に於て本會第四六回常集會
開會致し候に付御繩合せ御出席相成度候
也

明治四十年十月五日

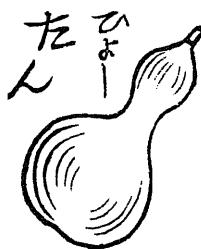
フレーベル會

會 告

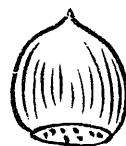
明治三十九年四月より同年十二月迄の會費御滞納の方は書肆弘道館へ
御送附下さる様豫而申上置候處未だに御滞納の方有之是非なく今般本
會より立替支拂置候に付爾今本會へ直接納附下され度、尙帳簿整理上
差闇不妙候に付此際至急御納附相成度御願申上候也

明治四十年九月

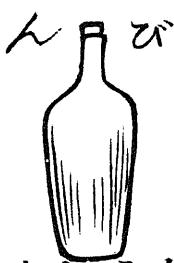
フレーベル會



た ひ ん



り く ろんこ ごんどう



ん び



山のじふ



り ま

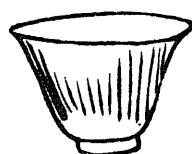


ん や や ち

いだるま

み わ く

ご ま た

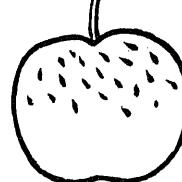
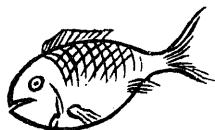


い た

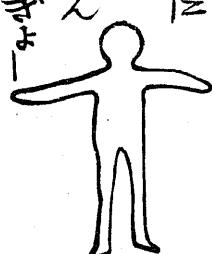
い た く か

し な

ら き



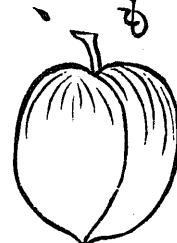
ぎ ん い



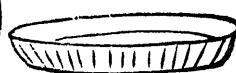
く そ ろ ー



、 も



ん ぼ





第十七卷第十號

學校や幼稚園の様な公けな場所では隨分訓練日誌とか保育日誌とか云ふものを毎日記入して居る様であるが斯かる公の場所でなく一個人の家庭内では未だ何處でも斯様な記録を毎日造つては居ない様である。保育日誌とか育児日誌とか云ふものが教育上必要なものならば是は實に學校や幼稚園のみに必要でなく一個の家庭にも必要に違ひない。殊に家庭教師とか家庭保姆とか云ふものを特別に雇ひ入れて居る所では主婦や主人が幼児に接する時間と云ふものが頗る少ないのであるから、是等の日誌を暇に任せて見るので幾分か自分の子どもの平素の様子を知ることが出来であらうと思ふ。家庭教師や家庭保姆たるものは自己の職務の一部として之をつけなければなるまい。

育児法の誤謬

篠田利英

家庭の事と云つても、別に耳新らしい考へもなく毎に同じ事を繰返すやうなものだが、所謂歴史は事實を再演すると云ふが如く、今まで家庭の事に就ても斯様な事を繰返さねばならぬと云ふも餘儀なくせらるゝので、それは外でも無い、即ちよが始終口癖のやうに目に觸れ耳にする毎に傷心になりて叱ると云ふことである、

この叱ると云ふ事は、子供の身心を萎縮させて暢發することを妨ぐるものである、左れば何うか之を絶えて無くすると云ふことは不可能であるが成るべく之を少なくすると云ふことは、最も育児上に有功の事であると考へる、

固より子供は尙ほ未だ辨別契合など、云ふ智識の發達しないものであるから、自然何れが悪戯に

なるか又爲らぬかと云ふやうな考は薄いものでなければ深く咎むるに足らぬものである、併しながら之が親たるものは克く是等の辨別の就て居らぬものは無いのである、最も子供を育て、行くには、父兄たる者が仔細に監督して寛厳宜しきを得て、或時は叱らねばならぬ事もあるが、廣く世間を渡すに、多くの場合に於て、夫等の區別を辨へてする程の考の深い親達の専ないのは甚だ殘念である、

チョット子供が何かする親は直ちに悪戯の名の下に於て叱かるけれども、その悪戯と云ふものは實に無邪氣のものであつて、少しも心あつて爲るものでは無い、偶々故意に出る事が無いでもないが、左様いふ場合は甚だ稀であると思ふのである例へば、親が障子の張換をして居るのを見て、直ちに子供は其所に來つて紙を剥がす、親は之を認て悪戯とするけれども、子供の心には、親も剝がすから自分も爲ると云ふ極單純な考で、その間

に何等の區別はないのである。また屋外に出で、石を投げても悪戯にはならぬけれども、之を座敷や庭園内に於て爲るときは直ちに悪戯と目せらるゝ、また棒切を持つて庭の土を攬き廻はした時は叱られぬが、若し母親の傍に來て尺度を弄へば是また忽ち悪戯として叱責せらるゝと云ふが如き實例は決して尠くない、併しこの時子供の心に於ては、屋外と庭内にて石を投するも、また尺度と棒とを以て遊ぶ間に何等の區別は認めないのである、左れば果して何れの遊戯が害になるか、或は爲らぬなど、云ふ考は毫も無い恐らくは世間多くの親達も此間の區別は大いに苦む事であらうと思ふ、素より悪戯本來の意味に於てする悪戯は、設令前述の如くその場合は僅少なるにもせよ、その時は寛假せずして叱責せねばならぬけれども、子供の爲る多くの場合は幾んど無邪氣で、他に遊ぶ方法が無い所より爲るのであれば、通常世間で見て以て悪戯とする所

のものは、その親たるもののが子供のために相當の設備さへして遣れば、叱責する度數を減少することができるやうと思ふ、併し相當の設備と云つたとしても、無暗に鞦韆を備へよ運動場を造れと云ふのではない、各自自家の生活の程度より割出して、玩具または適當なる所謂小供の嗜好に投するやうな物を具へ、或は夫等を具へざるも、適當に小供を遊ばせるやうに指導するものさへあれば、決して子供が有用なる物品を傷めるなど、云ふ事は無くして済むのである、

一體子供といふものは、寸時も手足を動かさずには居られぬ性質のもので、同じ口を動かすと云ふ中にも、口を動かして飲食するとか、或は饒舌をするとか、若くは手を振るとか足を擰ぐるとか少しも静止して居ないのが子供の性質である、左れば親々たるものは克く斯の子供の性質を呑みこんで之を害のないやうに導くのは親たるもの、責任である、それにも關はらず、且つその行爲の果

して善意であるか或は惡意であるかと云ふことをすらも究めずして謂はゞ自己の任意に之を叱責すると云ふは、その曲は親にありと云はねばならぬのである是は世の親たるもののが大いに育児上注意を拂はねばならぬ事であると考へる、

加ふるに子供が眞に惡意は勿論、善惡の境を脱して無邪氣に遊戯して居るものを親たるもののが、己れが都合上、予は殊に己れが都合上と云ふ何ぜなれば世の多くは時として子供が平常より以上の悪戯を爲すり自己にして閑散に苦しむか若くは他に喜悦を以て充さるゝ時等は、殆んど一笑に附して之を叱せざるのみならず却つて之を歡賞するの態度を出ることあり、之に反し、若し自己が一種憂鬱の暗雲に鎖され、或は不快の感に打れつゝある時は、常に一瞬半顧に値せざる遊戯も、忽ち青天の霹靂一聲迅雷耳に蔽ふに遑なからしむるの奇觀を現すことがあるからである、

此く事の善惡を問はずして容易叱るときは

子供をして反省の餘地なからしむると同時に、身神を萎縮せしめて暢然したる性質に育て上ると云ふことは到底出來ない、假りに身體は缺點なく育つても、精神が萎縮して至み僻んだ不具者となるのである、且つ斯様に叱り癖がつく時は、子供ながら其事に慣るゝは云ふまでもなく、それが第二の天性となつて成人の後怒り易き性質と變じ、只に己が些細の事にも怒るばかりでなく、その怒りを他人に移すやうになる、容易に怒りを他人に及ぼすやうになれば、知らず〳〵人の怨みを買ふことが數次である、諺にも世には味方千人に仇敵千人と云ふが如く、尋常では最も此の如くであるのに、若し怒り易くして人の怨みを買ふとの度重なれば、従つて自己の身を亡ぼすの日を早めしむるのであれば、親たるものは最も早く此點に注意して育児の誤謬に陥らぬやう、且つは子女の将来をして身神ともに健全に幸福に生活の意義を完かしむるに努むるは、正に今日世の父母たる者の執るべき急務であらうと思ふ、

幼稚園攻撃



判つた様で判らないのは幼稚園問題でせう。フレーベルが始めて幼稚園を創立した當時は無論の話、我國に於ても明治九年に始て女子高等師範の附屬として設けられてから種々様々な批難やら攻撃やらが一時は中々に盛に出ましたが夫れも解決した様な、しない様な風で何時か立消えになつたと思つたら昨今又々此問題が再興して來た様で去る六月の京坂神聯合保育會が京都で開催された時に京都大學の谷本博士は此問題に就いて論議されて自らの教授オーガスト、ケーラーの書いた十五ヶ條はれたそであるそして其際獨逸國ゴータ師範學校の幼稚園攻撃の中七ヶ條に就いて述べられたそを

で會員の某氏よりは其餘の箇條と云ふのは何なんなものかと云ふ質問が參りましたが是は去る明治卅一年の四月本會第三回の常集會で客員野尻精一氏が詳しく述べられて居るので本會第三年報告に記録して居りますから當時の會員諸君は既に御存じの事と思ひますが、折角の御質問でもあり且つは新會員も多數の事でありますから茲に當時の演説筆記を再録致さうと存じます。歴史は繰り返して居ると申しますから別段陳腐の譏もあるまいと存じまして（以下演説筆記）

幼稚園に關する書物は世間に多くありません。獨逸のゴーター女子師範學校教師であつたオーガストケーラーの著した「ゼブラキシスキンデルガーデン」と云ふ書物は、實際の方法を記したものでありますが此書は三冊あつて、一二の二冊は幼稚園保育法で恩物の取扱遊嬉を説てあるし、三は幼稚園の教育で保育に付ての理論をかいしたものであります、今日は此三の卷につき處々考をも加へ

て御話しやうと存じます

抑幼稚園が世間にあらはれたのは新らしいことで

フレーベルが自己の建てたる保育場に幼稚園の名

を付けたのは千八百四十年であるから今より五
六年以前のことである爰に於て始めて幼兒を保育す
る場所出來て世間で種々の批評が起つた其中には

批難する人も少くない又之に反してフレーベルの
考を賛成し批難に對して辨護する人も少くなか
つた今此に於て其難辨護話を話すも面白きことで
あらんと思ふ尤も種々の人から云ひ來りしものを
集めたものであるから其説の衝突することもあり
ます先づ批難に付ての説を擧げると、

一 幼稚園は害物である善からざるものである其善
からざるものゝ内にも止むを得ざるものがある
例へば監獄は善からざるものだけれども已を得
ざる必要あつて設けられて居る然れども幼稚園
は必要なる害物でない、不必要なる有害物であ
る小兒依托場 職人の小兒の保護所、又幼兒學

校と稱するものは、早くより歐洲にありて必要
なるものであるされば幼稚園は害物なるのみな
らず必要でない、

二 幼稚園は凡て富貴なる人の幼兒の爲にて母親を
して其本分たる幼兒の教育を怠らせ母親に横着
を教ふるものである、

三 幼稚園廣く普及すれば家庭の教育が廢せられて
しまふ何となれば幼稚園に幼兒を通はしむれば
母親が己の横着を助けられて子供の教育に心を
盡さない故に幼稚園廣く行はるれば家庭の教育
は廢せられて天然自然幼兒の教場なる家庭のよ
き影響を三四才に止めて受しめないやうになる
四 幼稚園は遊嬉をする學校である抑遊嬉學校なる
ものはなき害である故に幼稚園は譯の分らぬも
のである、

五 幼稚園の保育は子供らしさ處を早く失つて天然
自然の無邪氣にして有の儘に觀察せる所を妨ぐ
無邪氣の遊に付て色々に考へしめ年少の内より

六 小利口の者となす、
幼稚園は幼兒を或定りたる型の中に入れフレーベルの考へた或一種の偏頗なる者にするから幼兒はふとなく從順なる者となれども意地なき臆病者となる。

七 フレーベルは「キンデルガーデン」と名けたる自己の幼稚園に於て幼兒が觀察し又遊嬉せる簡単なる事物を自己の考にて種々の理屈をつけ拵へ事にしたのである實に誤りたる事である、
八 幼稚園に於ての教育法は理解し難き陰微秘密なる符號の如きものを用ふる事が多い是はフレーベルの理解しがたき主義の少からず批難と一は幼稚園でする業の上に就て、例へば箸を二本ならべて川があるとか又橋がかゝれりとか云ふを理解しがたき符號の如きものと云ひたるなり九幼兒が自然に砂を持ち又其他種々の遊びをなせるを自然に任せ置く方が遙かにフレーベルの考へよりも價値が多い、

十一 幼稚園では幼兒が自己の遊嬉のことを謠ひ

がらなぜとも、かくする時は幼兒を利己主義にて私慾を養ふ且又自己の現になることを謠ふ

は寫生的にも風韻に乏しき俗なり、

十二 幼稚園に於て幼兒に遊嬉を教ふれども是は誤りたる事なり自然幼兒自ら好でなせばこそ遊嬉

なれ然るを幼稚園にてなす如く教へてなさしむるならば眞の遊嬉ではない、

十三 幼稚園より来る幼兒は沈着なる仕事を嫌ひて遊びを好み學校に入りてよりも注意満く結果が惡るい、

十四 幼稚園は植物を培養する「ムロ」の如く自然に時を得れば咲く花を人工にて早く開花せしむるやうで自然の發達に背いてをる、

十五 幼稚園は國家宗教の爲に害がある、幼稚園の保育法は社會主義を幼兒に注入する又幼稚園は

宗教をはなれて教育せんとするを以て耶蘇の爲に害がある故に國家より嚴禁すべきものである斯く種々の方向より批難して居る就中、第十五の批難については元よりフレーベルの教を誤解してから起つた説であるけれども政府に於ても其心配があつて千八百五十一年にプロイセンに於ては幼稚園を嚴禁し千八百三十年に至りて之を解くやうになつた。

右の批難に對しては一方の成員より種々の辯護をして居る其説を擧ければ次の様なものである、幼稚園は今日必要にして人間に幸福を與ふる組織のものである之に依て幼兒をして心身共に適當に教育する上に付ては家庭を助け幼兒の發達を進むるに最も必要なものである若しこれなくは今日多くの家の兒幼をして下婢子守路傍等の教に任さなければならぬ然るに幼稚園があつて始めて之より助け出すことができるのである幼稚園は富貴の人のみならず凡ての幼兒を教育

する處のものである、

三 幼稚園は家庭の教を廢する批難があるけれど決して然でない幼稚園教育は家庭教育上によき影響を與へ正しき教育の精神を注入するものであるそは幼兒成長して後のみならず幼稚園に通ひ居る幼兒あらは其幼兒、幼稚園に於てよき教を受くるを以て其精神、親及兄弟に及ぼし一般に家庭の教育を進めることができる、

四 幼稚園は家庭教育を廢してをらないのみならず一週間に二十五六時間兩親たる者職業又は家事の爲に十分幼兒を世話すること能はざる僅少の時間のみ幼稚園に於て教育するのであるから幼稚園ある爲に家庭の教育を廢するといふ説は誤つたことである、

五 幼稚園は遊嬉する學校であるけれど幼兒の精神を適當に發達せしめ幼兒自然に有する活動の傾きを自然の順序に從て發達せしむるもので學校の如く教授するものではない、

六 幼稚園は子供らしき所を失ふといふ批難があるけれど然ではない幼稚園こそ幼兒の子供らしき

精神を一層長く維持す若し幼稚園がなくて幼兒は常に大人の側にあつたらば早くから大人めいて

子供らしき所を失ふものであるが、幼稚園では保つことができるものである、

七年輩の幼兒が相集るから長く子供らしき所を

云ふ批難があるけれど之は事實に違ふものである尤も善き事を教へて惡より遠ざけ駄をなすを

型にはめると云へば型にはめるに相違なき幼稚園では正しき道理に叶ひたる規律の外は幼兒

か特別の性質により自由になすを妨くるものでない或人の批難の如く一種の型に入れれたる人間を作り出すものではないのである、

八フレーベルはむつかしき工夫をして幼兒自然の勇氣を妨げると云ふ批難があるけれど幼兒の仕事はフレーベルの發明ではない昔から幼兒自

然にしてかる遊嬉をならべたるもので決して自然に背いては居ない。

九且又遊嬉を教へ恩物を與ふる仕方は古から母親が自然に用ゐる方法でフレーベルの作りたるものではない、

十幼稚園に於て謡ふ歌、並に謡ひながら遊嬉をするは生れる繪の如きものである之によりて幼兒が人間の生活に必要な仕事の實物教授を受くるもので其働きを實地に觀察することを得るのであるから之に對する批難も考なき批難である遊嬉を教ふるはわるしと雖、教へたりとて差支はない、

十一幼稚園の仕事は教へ又教へたる上にて幼兒に自由になさしむるとの出來るもので教へたりとて害はない、

十二幼稚園は「ムロ」の如しといふされとも幼稚園には常に暖かき春風が吹てゐる、

十三幼稚園に於ては幼少の時より同年の児と交際

せしめ早く社会の生活を覺えしめ又幼稚園に於ては早くより耶穌の精神を幼兒に入れるゝを以て國家宗教に背くと云ふは誤りたることである、幼稚園の發明は新しきを以て批難又辯護交々起つて居る、早くから幼稚園を贊成する人の中には政治家、宗教家、學者等種々の社會の人である之によりても幼稚園は偏頗なる作り物ではなくて教育上實際の必要あることは明かである故に追々幼稚園の贊成者を増加して至る所に其設があるされど只其名のみでフレーベル本來の主意に適せるものとは云ふことができないさればフレーベルの主意に付て明にするが必要である尤も日本ではフレーベルの主意にのみ依ることができないけれど、フレーベルの思想を理解することは必要である、されどフレーベルの幼稚園に付ての思想を詳しく述ぶる時もなく且實際從事するゝ方々であるから今は其大要を述べておくだけである云々、

一般教育か特殊 教育か 和田 實

幼稚園の缺點とか幼稚園の攻擊とか云ふ聲が一時盛んであつた昔の事ならいざ知らず、今時幼稚園其物の價値を危む人があらうとは思はなかつたのに是は又何とした間違ひにや幼稚園の効果を危む人が今の教育社界にあらうとは。然も夫れが我幼稚園社界にもあらうとは誠に意外な感に打たれざるを得ない次第である。斯る浮はつい考を持つた所の保姆が此幼稚園社界にある以上は逆も我児童教育は發達することが出来ない。そこで我輩は思ふ存分之を攻撃して見たいと考へたので秃筆を呵して書き出しては見たが生來の筆不省、鋒先はいつかな動かない。

余事は措いて本題に入いらう先づ然る所に一人の最もらしさ保母の先生ありさと思召せ、此人或時

人に語りて云ふ、

幼稚園は上流の人の子弟か若しくば細民の子弟の爲めに必要なので中流の子弟の爲めには然したる必要がない。故に自分は幼稚園の保母はして居るが自分の子供は幼稚園に入れないのである。

と斯う云ふて居つたそをだが是は又何とした考へ違ひだらうか、僕は斯かる考へ持つた保母が他にもありはしまいかと思ふて心配に堪えないのである。思ふに

此人の勤めて居る幼稚園と云ふのは普通の幼稚園ではなくて一部細民の爲めに建てた特殊の児預かり所に奉職して居る人か然もなくば上流の放逸傲慢なる家庭に人と爲つたやんちゃんな子供を預かる一種の感化院の幼稚園に奉職して居る人であらうそして幼稚園と云ふものは己れの奉職して居る様な所を云ふので普通一般の人の子弟の入る所でないと思ふて居るのであろう。と思ふ、若し果して然

うならば井蛙の見で寧ろ憐む可き次第ではあるが若し又然らずして身は立派な公立の幼稚園で然も一般に世人の子弟を集めて居る所の幼稚園に奉職して居る人であるならば聞き棄てには出来ぬ事で之が管理者たるものは宜しく追求する所があつて然る可いだらうと思ふと何故と云ふに斯る保母は幼稚園の本旨とか幼兒教育の本領とか云ふものを常に誤り易い仕事であるから造次顛沛も徒らに形式に拘泥せず其本旨本領に戻らない様に心掛けないと動もすると種々な誤謬に陥るものである。故に幼稚園に職を探るものは常に幼稚園に關する原理原則の研究を怠つてはならぬ。然るに己れの採れる幼稚園保母の職務が教育上如何なる地位にあらかの見識も何も立たないと云ふことでは誠に頼み少ない教育者と云はねばならぬ。

全体又幼稚園と云ふものは一般の社界に果して不必要のものであらうか。文明は日に月に進歩して教育は一日と其必要の度を強めて行くのが今日社界の趨勢である、此時に當つて世人は其子女を満六才に達して小學校に入學し得る迄慢然放任して置くのか得策であらうか抑も父之を成る可く早く専門の教育者に托するのが得策であるか、別段議論する迄もなく成る可く早く之を専門の教育家の許に送るのが適當であるに違ひない。既に成る可く早く教育家に依頼す可しとせば各家庭では其子女が晩くも四才に達した時は之を幼稚園に送る可きである。實際幼稚園に通ふ可き年頃になつた子供の慢心家庭で放逸に遊び暮して居ると云ふのは頗る弊害の多いものである殊に身体的發達の良好なる子供程種々なる惡癖惡習慣に陥るものである。そして又斯る子供を其家庭に持つて居る父兄は毎日子供の爲めに夫妻親子の間多少の異見や衝突に遭遇しないことはなく、子供の爲めに却つて

家庭の煩はしさを感じる様になるものである。且又今日の進歩したる教育思想から見れば四才以上に達したる子女の教育は決して家庭の仕事の能手間等に一般的母親が注意する位では到底間に合はない。其監督は不行届であらうし指導は不充分なるに極つて居る。そこへ持つて来て家庭は幼兒が己と同等の發達ある友達を得ることが出来ない爲めに幼兒自然の無邪氣な遊をするのに頗る都合が悪い。従つて其社交的生活も家族以外に擴張することが出来ない。

以上數多の理由に因つて幼稚園が今日小學校以前に於ける普通教育上の一公共的機關として必要なことは明かな事實であらうと思ふ。従つて世人は専門の教育を経たる指導者看護者なくして四才以上上の子女を家庭の附近徘徊せしむる事を以て教育上恥づ可き者と思ふ様にならねはならないのである。幼稚園に奉職して居る者は義理にも此方針で世人にも對し父兄にも對さなければならず。又世

ひとを勧誘して一人でも幼稚園の園児を殖し一つで
も幼稚園を増させて、フレーベルの遺志を普及し
幼稚園事業を普及せしめて彼道路の上に學齡前の
子供の悪戯に耽けつて居る様なものを根絶する覺
悟でなければならぬのに事實は是に反して身自ら幼稚園の價値を傷ける様な言論をして居るとは
如何にも情けない話である。

或は又此人は自分の奉職して居る幼稚園に自分の
子供を入れるよりは自分の家庭で行らせる方が完全
全な保育をすることが出来ると考へたのかも知れ
ぬ。若し然うであつたらば同時に此保母の出て居
る幼稚園は極めて不完全な保育をして居る處であ
ると云ふことが出来る。果して然りとせば此保母
は人の子を貰ふものである。自ら採れる職務が不
完全に行はれて居るならば何故に管理者に請求し
て之を改善する方法を講じないか。今日の學理と
實驗とは確かに幼兒教育を成功せしめ得ることは
疑ひない然るに之を是しないで置いて袖手してあ

きらめて居るは如何にも暢氣な事である。若し又
今日の學理に承服する能はず幼稚園教育の實際に
嫌たらすとせば何故に進んで是を學者に訂さない
か本誌の如きは悦んで斯る人の發表を掲載して天
下識者の議論を誘起し様と努めて居るのであるが
本誌不幸にして未だ斯る熱心な保母の研究場にさ
れないのは遺憾千萬である。是に至つて思ひ起
ことがある。嘗て東京府教育會雑誌に誰であつた
か名前を記憶しないが次の様な意見を云ふた人が
あつた。

保育事業は之を他の教育事業に比べると頗る進
歩が遅い、是は何故であるかと云ふと、是は女
に任かしてあるからだ兎角日本の女は人に云は
れた事をする丈は可なりするが發動的に積極に
研究などすることは至つて不得手である。

と云ふ意味の論文があつた様に思ふ。今にして考
へると思ひ當る所がある様である。

夫れに又女と云ふものの頗る自己中心で困る自分

都合さへ能くば職務の爲とか事業の爲めとか云ふとは餘り考へないらしい。否或時は自分の都合自家の都合、夫の都合子供の都合の爲には職務をばかなり犠牲に供するに頗る勇氣がある様である。従つて積極的に自分や家庭の或物を犠牲としても或研究をし様とか公の爲めに計らうとか云ふことは先づ出來ないのが多い、従つてい加減に其日を送り僅かに責を塞いで置くと云ふことは女子の教師にはわり勝の様だ、攻撃が横道に入つて思はぬ人身攻撃になりそをだが全体幼稚園の保育法と云ふものは今日に於て研究の餘地が中々多い。

是に從事する人は自ら大に研究的態度を以て掛らなければならぬ然するには多大の無駄骨を折る必要があるので誰れも乗つ切つてしないと云ふのが現時の状態らしい。

要するに幼稚園は小學校以前に於ける普通教育機關として一般に切要のものであることは進歩した文明國の一資格とも云ふ可きもので決して上流

社界又は下流細民の子弟にのみ限られた一部の人との特殊教育機關ではないのである。
併し其所謂保育法なるもの即ち幼稚園教育法は今日に於て果して誤なきや否やと云ふことは之は別問題である。吾人も今日の保育法を以て完全なるのとは思はない。否大に改良する必要あることを認めては居るが併し幼稚園を以て普通一般の家庭の爲めに必要とするとは決して變りがない。世の幼稚園に從事せらるゝ保姆の諸君及幼兒教育に熱心なる父兄諸君は徒らに奇矯な言論に惑はされないで信用ある教育家に其幼兒を托されんことを希望します。



お伽芝居に就て

巖谷小波

▲明治四十年は恐らく文藝勃興の時代であるまい。その氣運に乗じて兒童の多年渴望して居た、お伽芝居なるもの、新に芽を吹き出さうと云ふ兆のあるのは、僕等子煩惱黨の欣喜措かざる所である。

▲元來お伽芝居なるものは、先年川上貞奴一座が初めて我邦に演じて以來。暫時中絶の姿で其後左團次が菟升時代に二番目狂言として一寸試み近く大阪日報の記者が、大阪で旗揚をした位の事で實はまだ一向研究されて居ない。

▲尤も此春、本郷座の若手連中が、新聲館で一度演つた事もあるが、これは殘念ながら、殆んど物に成つて居なかつた、隨つて世間からも、何等の反響を與へなかつた様である。

▲然るに、氣運の然らしむる所は、いよいよある

一派の人々の手で、近々お伽劇専門の研究が初められ、やがては花々しく打つて出やうと云ふ、計畫さへあるに至らしめた、蓋し大いに賀すべき事であると同時に、一言念の爲め云つて置き度い事がある。——それは一面演者に對して、一面看客に對して。

▲まづ演者に對しては、一も二も無く、子供氣と云ふ事を要求する。お伽囃を作る上に付いても然うだが、苟くもお伽芝居を演ずる以上、まづ自分自らが、子供になる氣でやらないでは、如何に熱心に演じても、其熱心は皆正鵠を反れて、一向子供の感興を惹くまい。

▲今までの演者を見るのに、大阪のはまだ見ないから知らないが、兎角芝居をすると云ふ方に傾いて、お伽と云ふ點を忘れた觀がある、中には、お伽芝居などの子供だましは、馬鹿々々しくて本氣に成れないと、全く上手づた演り方をするものもあつた。此等はお伽芝居の賊として、寧ろ樂屋へ入

れない方が可い、

▲又お伽芝居の中には、往々人間以外の鬼神、妖怪、天象、地精、動物、植物、時には器具、調度の類迄も扮して演らねばならぬ場合がある。其時の用意としては、まずその扮する目的物の、特性特質をよく呑込んで、所謂急所を擱かまねばならぬ、
 ▲己に急所を擱みさへすれば、必しも犬の縫ぐるみを着ないでも、また鶏の羽を纏はないでも、犬は大らしく鶏は鶏らしく見えるのである。要するに輪廓は眞に迫らずとも動作に骨を得て居れば躍々として其物が活きるのである、

▲それから白だが、これも脚本の示す所を、必ずしも一字一句暗誦するには及ばない、寧ろ其筋を陳べても、却つてそれが活きて聞える。即ち白の上に於ても、器械的より意識の方があつて、遙に優ると云ふ事を承知して貰ひたい、

▲又お伽芝居には、必しも型なるものは無い、強てそれを定めるならば、只見た目の美しく、面白く、無邪氣に、上品にあれば可いのだ、それには多く喋つて筋を通さうと云ふより、多く動いて意を判じさせるが優しだ、

▲尙一つの要件としては、音楽と振事の利用が欲しい、それも込み入つた物には及ばぬ。子供の耳に入り易く、目を樂ませる程度に於て、一ト工夫あれば更に妙とする。此點から云ふと、どうもお伽芝居なるものは、新派より舊派の物らしく、さて看客に對しては、——寧ろ社會一般に對しては、一つ斷つて置く事があるのである、それは他でも無い。お伽芝居は讀んで字の如く、子供のかの爲の芝居である。決して教育的の演劇では無い。強て教育分子を含ませるとすれば、それは智育や德育の方面よりも寧ろ美育の點にあると云ふ事を、飽くまでも了解して居て貰ひ度い事だ、

▲此間京都でお伽劇の演ぜられた時、其地の所謂

教育家連中は、之に要求するに今少し教訓的の材料を以てしたさうだ、僕は聞いて腹が燃れてならない。

▲思ふに然う云ふ連中は、菓子屋で賣る饅頭や煎餅に胃散を入れよ、寶丹を混せよと云ふに等しく沒理漢も甚だしいでは無いか尤も斯う云ふ偏狭な理窟は、お伽噺にも屢々浴せられる事だが、彼等は殆んど子供の氣を知らない、否、教育の本義を知らない。

▲子供は常に學ばねばならぬと同時に、また常に遊ばねばならぬ。然るにその遊ぶ時間にまで、學べくと責られては、何所に立つ瀬があると思ふ而も其遊び方が趣味に富んで而も健全なものであるなら、なまじ偏屈な學び方より、何れ程益があるか知れないではないか、

▲此點から又僕は云ふ、このお伽芝居に對して強いて教育的なるを望む輩は、又斯道の寇として、木戸近くには寄せ付けぬなり、



▲とは云ふものゝ、何もお伽芝居だからと云つて決して教訓を排斥するのではない、むしろ大なる教訓を含ませるのが其上乘なものであるのだ、然しかし只その教訓が決して露骨で無い事を要する、されば、偶々教育家の要求する様な、教訓材料を演ずるにしても、成るべく其の意を表面に顯はさず、見た目には飽くまで面白く、出来るだけ美しく演つて貰ひ度い、

▲味噌の味噌臭きは、眞の上味噌にあらざる如く教訓の教訓臭いは、大なる教訓でないと云ふ事をよく悟り得る程の達識を、僕は天下の兒童に代つて演者と看客とに望むのである、

家庭の圓滿は忍耐に依りて生ず

小貝貞子

世は日に月に進み、女子教育の如き又長足の進歩を見るに至り、從來は男子のした事を女子迄がする様になつて參りました。内地に於ては勿論、遠く暹羅、蒙古等に、女子が單身で出掛けて行くと云ふ様な事は、全く近來教育進歩の結果と云はねばなりません。斯んな風であるから、昔の女子と今の女子と比較すれば、今のは昔の人より立優つて居なければならぬ譯であります。實際のところ、劣る點があるのです。先づ第一に家庭を圓満に治めると云ふ事、是れは到底昔の女子に比すべくものであります。何故でしようか、或人は西洋風が入つて來たとか、教育の方法が悪いとか、又は社會の罪だとか、家庭教育に缺陷があるとか云ひますが、私は是れ以外、即忍耐力の缺乏が主因を成して居ると思ひます。此事實は昔の

女子の方に就て見れば仔細に分明する事で、一例を擧げますれば谷子爵の夫人の如き、最も好く之を證明して居ります。尙私の友人に十年間夫にキラハレ、其間忍耐に忍耐して遂には夫を動かし姑を感じしめ、茲に圓滿なる家庭を結んで、前の苦痛を償ふても尚餘りある至幸至福の身となつたものがあります。口の十年間は瞬間です、けれども數の十年間は如何に永い日月でせう。私は感嘆の餘涙の下るを覚えぬ位。此れは一二の事例ですが、昔の女子の學問は淺かつたが、武士氣質を吹き込まれて居たので辛棒も従つて強かつた事と思はれます。是れに依つて見るも、今日の女子は學問智識以外更に精神の修養を爲さねばならぬと考ひます。斯様に申せば若い者許り責めると仰つしやるかも知りませんが、姑も亦此場合相當に忍耐をして欲しい、姑と嫁とは如何して年齢に於て二昔、ザツと廿年の相違があるから、物好みも亦從つて相違する點が多い、故に姑は嫁に對して自

分の思ふ鑄型に入れ様とするは無理である、姑と嫁との不和は主として斯る場合に生ずるのであります、故に始は道理に外れぬ範圍に於て嫁に自由を與へ、些事は成るべく互に忍耐をするを可いと思ひます、或老人は曰はれました、子に向つて親に恩を返せと迫るは無理也、子は其子を養育するの重任を帯びりと、味ふべき言葉で、嫁の心をも亦察して居る人であると云ふ事が明瞭に讀まれます、又或人は娘を嫁に遣はすに際つて、夫の愛せ申されました、是等は夫れ／＼味ひて興味の盡さぬ話であります、授實際に臨んでは何れも至難な事柄であります。

之を要するに姑は嫁を愛し、嫁は姑を敬するは勿論であります、其間に生ずる萬般の事、譬へば不利の動機となる様な場品に、互に忍耐を以て成るべく自己を制する事は、家庭を圓満にして幸福なる一生を送る最上の方であると思ひます而し

て此難關を切り抜けた人は、世に立つても、立派なもので、忍耐をした、苦勞をしたと云ふ人と、然らざる人とは、誰の目に見ても玉と石との差のある事は争はれぬ事實であります。

◎偉人の母は皆田舎に住めり

下田歌子

男子とは違つて女子が家を飛び出して一人よるべなき都の空にあがれるのは餘り同情されません。其の理由は自分勝手に出来いたした女學生は十中の八九はわたり者が両親のもとであまし者か、兎に角餘り感心の出来ぬ者の方が多いやうであります。一體女子が學問して豪い者になるのは先づ格外であります、今更改めて申迄もありませんが樂しき家庭の主婦となり、夫を助け、子女に完全なる家庭教育を授けて、茲にはじめて社會有益なる人物を作ることの隠れたる家庭教師となるのであります。樂しきホームを作つたり或は人物を生ずるば必ずしも都に限る譯ではありません。

ワシントンは實に世界的偉人であります。其お母さんの事を見ますると、いつも生地の小村に潛んで、家事を整理し、愛兒を撫育するの任を重んじて、一度大に都の地に足踏みした事はありますんでしたが、其子は英名を世界にして今日の如く富強ならしめたる大政治家となつたのであります、諸葛孔明の妻はさぞ豪い行ひでもあつた者のやうに思れますが、さうではなく片舍田に多くの柴畑を所有して婦女のする事に就て居りまして又我國では浦の母公は河内の生地を離れた事のない方でありますれば、古今東西英雄の母たり妻たる人は唯々女子の本分をよく務めたと云ふ一點であつて、其結果として世界的豪傑歴史に有名の人物を出しました。

鼠族驅除と家屋改造

醫學博士 井上豊太郎

西洋の文明國にベストが無いと云ふのは、全く家屋の構造が善く出来て居る爲めに鼠が繁殖する餘地が無いのに因るのであらうと思はれる、それで併し往々外國より輸入した古綿其他の物の厄介も依て一時ベストの流行したと云ふ例もあるけれども、元來日本のやうに鼠族が隣家から隣家を飛歩くと云ふ程の餘地が無い爲めに、忽ち其流行が止まるのみならず其病根も絶滅して丁度云ふ譯である。之に反して我邦の如き家屋の構造ではあるは、一朝ベストが這入つて來ると却々之を退治することは困難である。成る程日本の家屋の構造と云ふものは日本温度に適した構造ではあるが。西洋の家屋建築法を其儘日本に輸入することには不適當かも知れぬから、同じ西洋館の型は採りても日本の建築者の考で日本の温度に適するやう

な構造にするだらうと思はれる。勿論建築の事は専門家の意見に任せて宜いけれども、唯だ吾々は日本の家屋もどうか一つ全家屋を隅から隅まで鼠の自由に往来の出來ぬやうにしたいものだと考へて居る。鼠と云ふものは一定の住居があると云ふ譯では無い、隣家から隣家と飛歩いて食物を見付けてはそれを喰ひ、そうして匿れ場所として多くは床下或は天井の裏あたりに晝は蟄伏して居つて夜になると跋扈し始めるものである。日本の從来の家屋の構造は實に彼が跋扈する餘地が充分に在る即ち壁と俗に壁板と云ふものとの間隔があるのだから、どうしても西洋家屋でなければならぬと言ふならば、それは我が日本の今日の民力の程度並に日本の氣候と云ふ點からして出來ない相談であるけれども、併し鼠の體軀と云ふものは風や塵埃に附着して何處にでも這入り込む微菌の如

き小さなるものでは無い、二十鼠と言つた所が種々な昆蟲類に比較の出来ぬ程大きいものであるから、彼等が自由に往來が出来ぬやうにすることは容易い話だらうと思ふ。今日は鐵葉細工も隨分發達して居るのであるから、鐵葉を以て鼠の往來する壁と壁板の間の口を塞ぐとか、或は更に進んで壁を兩面とも塗つて了ふ、日本の新普請は多く壁の片面だけを塗上げて壁板を打つ方は塗らずに出来て居る、それで鼠族が自由自在に其間に跋扈が出來る譯であるから、土を惜まず手間を掛けて上の梁の處までズツと兩面とも塗上げることにしたならば彼れが辛うじて一室の天井に侵入することが出來ても、今日の如くまた他室に向つて跋扈する云ふ事は困難であると思ふ。それから又鼠といふものは明るい處は遠慮して夜跋扈する位の奴だから、晝でも暗い處であると隨分騒ぐるから暗い處には硝子を張つて光線を取つて明るくして置いたならば、今日の如く鼠の跋扈が甚だしくない

だらうと思ふ。現在の家屋を見ると一間位の間隔に丸石を敷いて、それに根太を渡して、其上に柱を建てるに云ふやうな風になつて居つて、鼠が床下に自由に這入ることが出来るやうに造つてあるが、此頃では房州石とか云ふて廉價な石もあるのだから、さう云ふ切石でもズツと根太の下に敷詰めて置いたならば彼等も這入り悪くいだらうと思ふ、勿論牀下の空氣の流通を害すると云ふことは宜しくないから、所々に窓を附けて其處に網を張つて空氣の流通を圖ることは必要だが、兎も角も是からの建築に付ては牀下にも鼠族が這入り得られぬやうに改良しなければ、到底鼠の驅除と云ふことは六ヶ敷からうと考へる、殊に最も注意を要する場所は炊事場である、彼等は自分の匿れ場所として人家に入り込むものであるが、如何に彼等と雖も食物無しに永く人家に居ると云ふ譯には行かない、それで夜人の寝静まる所を窺つては炊事場を襲撃する、炊事場に行つて流しに溢れて居

る飯粒であるとか、或は魚の切出しだとか、其他の物を食して命脈を繋いで居るのだから、どうしても彼等は食物を取る場所として毎時も炊事場を襲撃するのである。それは日本橋區とか京橋區とか繁華な土地で家と家とが密接して居る處では、一軒の家で炊事場に注意をした所で、隣家の臺所から食事を取つてさうして矢張り天井に上つて生存して居ると云ふこともあらうけれども、マア山の手邊の庭園でも廣い一戸建の家であると、彼等も隣家迄行つて食事を取ると云ふことも非常に臆却であるから、其一軒の家の炊事場を襲撃するであらうから、さう云ふ處では炊事場と他との通行を堅固にして所謂兵糧攻めにしたならば彼等も大いに弱るに違ひなからう。抑も炊事場と云ふもののは吾人が命脈を保つ爲めに食事を取る上に最も大切な場所であるから、之に向つて充分に金を投じて完全を期すると云ふ頭を建築主は特にやならぬ然るに多くの家の建築の仕方を見ると、建築費用で

の殆ど三分の二以上は客間や床の間玄関等に掛けた病毒の種痘をする所の雪隠だとか、又今お詫しの一大切な炊事場と云ふやうな處には建築費の三分の一も掛けて居らぬ、大體から言ふと極く粗漏にしてある、殊に貸家杯に在つては一般にさう極まつて居ると言つても宜い、地方の方は又違ふけれども東京に於ては住民の十中の七迄は貸家住居である、其貸家の便所とか炊事場とか云ふものは、極めて粗陋に出来て居る。尤も近來は衛生の點から御上が御注意になる爲めに、昔の建築とは違つて便所だけは三和土にするとか或はコールタを布くとか云ふやうになつて洵に結構な話であるが、炊事場の方はまだ警察の御注意も無ければ制裁もないでの勝手次第な構造になつて居る。私は決して日本に臺所が悪いと言ふのでは無い。昔から働かしいやうに出来て居るのけれども、唯だ鼠が出入すると云ふ點に付て注意が拂つてない、それだから鼠が自由自在に臺所に出没すると云ふ譯で

ある。で日本の都會たる大阪とか神戸とか横濱とか云ふやうな處に、野蠻病のペストが年々發生して其跡を絶たぬと云ふのは隨分西洋文明國に對しても耻入つた話ではあるまいか、既に戦捷の餘威を荷ふて世界強國の仲間入りをした我が日本帝國に於て、かかる野蠻病が其跡を絶たぬと云ふ事に付ては餘程考へにやならぬと思ふ。それで先づ炊事場に付ても便所と同じやうに當局者が注意して下さると、ペスト媒介者たる鼠族の繁殖を防ぐに偉大なる効が有りはないかと私は考へて居る、この炊事場と云ふものは日本の風として又働きいと云ふので何處でも板を張る、其板が新しい内は鼠が板を破つて上ると云ふことも無いけれども板の下は自由自在に出入をして居る。家に依ては物置場が不足と云ふ所から炭薪の類を板の下に入されると云ふのが一般的の習慣であるけれども或る場合には漬物を入れて置くと云ふやうな事がある、それは成る程漬物に鼠がかかると云ふことは無い

であらうけれども、彼等は無遠慮に不潔な足で上つたり下りたりして漬物の甕を汚して了ふと云ふやうなことがある、無論甕に泥も着いて居つたならば注意をするかも知れんが、さうで無く唯だ目に見えぬ所の黴菌でも附着して居るのだと到底注意が届かない、それもペストの流行時には各自注意もするであらうけれども、平時には却々そこ迄注意が届くものでは無い。斯う云ふ徑よりして病毒を人身に傳播すると云ふことが統計を取つては見ないけれども随分あるだらうと思はれる、それで故に炊事場の下の方は三和土にして、さうして四方は煉瓦を積むなり石で以て圍ふなりそれは各自の都合に任せても宜い。若しそれが六ヶしければ安くて精巧に出来所の鐵葉を張つても宜い、尙ほ流し下から下水に出る所の口に網でも張つて置く、斯う云ふ事にして置けば鼠の往来する餘地は無い譯である。鼠と云ふものはどうして穴を開けるものか五寸や三寸位の泥は、イクラ抉つて外か

ら這入つて來ると云ふやうな鋭敏なものだから、一聞宛位の間隔を取つて丸石を据えて其上に根太を置いとく位の事では、外からでも庭からでも自由自在に這入つて來る、今のやうな家屋の構造法に依ては到底鼠を防ぐことが出來ぬ、どうしても臺所だけは周圍を煉瓦なり石なりで圍つて下を三和土にする必要があると思ふ。さう云ふ事にした所で大概臺所の區域と云ふものは極つて居るものだから大して費用も要さぬであらうが、已むを得ぬければ鐵葉で張るか板で圍ふのだが、其板も日本で一番能ふ使ふ三分板とか四分板杯では直ぐと彼等が破つて了ふから、一寸板にするとか、又鐵葉でも五寸以上一尺位地下迄埋めなければ可けない先づどつちかと云ふと下を三和土にして周圍を煉瓦又は石にすると云ふことが好ましいのである木杯である。自然々々に水を吸收するので時を経るに隨つて腐る腐れば自から病毒の繁殖する餘地を與へる譯になる、又妙なもので一たび拵へてしまふ

ふと容易に之を仕換へると云ふことは手慮却なものであるから、初めに思切つて煉瓦なり石なりで圍つて下を三和土にして置けば、隨分堅牢なものであつて家屋の生命と左程變らずに永く持堪へることが出来るから却て得策であると思ふ。臺所と便所と一緒に言ふのは可笑しいやうだが、一は不潔物を排泄する處、一は人生に大切な食事を供給する處だけれども、多く病毒はこの二ヶ處から傳播するものであるからして家屋建築主は意を茲に致して充分に重きを置くことにせねばなるまいと思ふ。便所の方は前に言ふたやうに今日は大分善くなつたけれども、臺所の方は中には私が話したやうに注意して居る人もゐるけれども、之が一般には行はれて居ないと斷言して宜いのである。諸君御承知の通り鼠と云ふものは臺所に行つて何も飲食物が無いと云ふと地面に溢れた汁までも嘗めて命脉を保つて居るものであるが、時に依ると石鹼のやうな物が置いてあるとそれ迄曳いて行く

或は玉子杯を持て丁々吾々も新しい石鹼シ曳かれた實驗があるが、チヨット考へると彼等の智慧では玉子杯を壊さずに持て行くことは出来ぬかのやうに思はれるけれども、彼等は却てうまい事をやるものである。或る記録杯を見ると、玉子の如きは一疋の鼠が兩足で抱付いて尻尾を曲げて自分の口へ尾の先きを咬へて居ると、他の鼠がその鼠の首筋を咬へて運ぶのだ云々事が書いてある矢張り丸石鹼を運ぶのも其手段と同一轍であらうかと思はれる。彼はさう云々やうな機敏な働きを爲して居る又人の名前は忘れましたが、或る人の話に據つて見ると、狡猾な鼠は人が寝て居るや否やを試験する爲めに板戸などを尾で叩いて見てそれから人が寝静まつたと云ふことを見定めて徐々と臺所や室内的食品の在る處を窺ふことをすると云ふ話である、それ程に奸策に長けて居る厄介な動物である併ながら之を驅除することは左迄六ヶ敷くはあるまいと曰ふ。彼の顯微鏡の力に依ら

なければ見えぬ所の云微有機體を防禦すると云ふことは實際出來ぬ話だらうけれども、鼠の如き動物を驅除する方法は少し心懸けたならば賭易い話であらう、即ち前に私が述べたやうな方法にすれば慥に鼠を驅除するに効が有ると信する。尤も併し人家稠密して居つて隣家の臺所も壁一重と云ふやうな處に在つては、自分の家の臺所だけ充分注意をしても、隣家の臺所が不完全であつた時には鼠の奴は隣家の臺所で腹を肥してさうして自分の家の天井裏で惡戯をして居ると云ふやうな譯であるから、どうしても隣傍相團結して鼠を驅除するとか云ふ方法を執らなければ効を奏せぬものであるそれで今日便所が改良されたと同じことに、炊事場の方も公衆衛生上御上の制裁が必要である、是非とも御上の力を藉らなければ一般に之を行つることは困難だらうと思はれるから。どうか當路者にも一つ御熟考を願ひたいのであります。此外申上げたい事も澤山ありますが餘り長くなつて諸

君が御退屈なさるに可けませぬから今晚は是位で置きまして、後日復た私の氣付いた所を御注意申上げること致しませう。……

▲いろいろの人　世界は廣し。人種は多し世の中には隨分奇妙な事がある。オーストリアの或所では色の成るべく黒い方が美人としてある。炭團に目鼻のお黒さんが大に持離されるさうだ。これに就て面白い話がある。先年英國人が其土地へ行つた處が土人の女共は其顔の白いのを見てお化けが來たといつて逃げ出した▲また南洋の或島では鼻の低い程好いとしてある。子供が生れると直ぐに親が其の鼻を押つぶして低くするのださうだ土人が西洋人を見て。可哀想にあの人は小さい中にお母さんの育て方が悪かつたからアンなに鼻が高いのだと云つて大さう氣の毒がつたといふ事である。ドチラか可哀想だか知れたものか△モウ一つはお臂の大きいのを好みアーヴィングの南の方のホッテントットといふ人種だ。こちでは子供の頃から成るべくお臂を大きくするやうに氣をつける。だから大人になるとお臂が後ろへ棚の様に突き出して子供が其の上に乗つて遊ぶ程ださうだ

近視眼の衛生

新免義男

近視眼は俗に近眼て眼鏡の力に依らなければよく遠方を明るに視ることの出来ぬとは誰も承知のをですか、今より十數年前よりだん／＼近視眼者の數が増加いたしまして眼鏡と近視者は種々其療法や豫防に心配して居ますが世間の一般の學生等は近視者は勉強家の證徴で名譽のよふに考へ上り社會殊に學者先生達の近視家が燐爛たる金縫眼鏡を用ゆるとの漸く多くなるにつれ一種の流行を來し男女の學生は勿論其他の健眼者迄が裝飾として金縫眼鏡をかけ得心がり、高襟連の異名中に數ラホームは世間眞面目に其療法や豫防法を研究して随分心配いたして居るに近視眼の方は却々反對で近視者の眞似を健眼者がいたしますは畢竟

其苦痛の少ないと眼鏡其物が一の裝飾となるところから斯る奇態を呈しましたのでありましょふが、兎に角近視眼者の身となりて見ますれば金縫眼鏡で得意がる譯には參りませぬ大に近視の衛生に就て研究し其豫防法をいたさねばなりませぬそれは近視眼は如何なものであるかをこれから御話いたし其衛生と豫防法を記載いたします、近視眼は近視の強弱によりまして區別して輕度のものと中度のものと強度のものと三段に分けます尤も其區別の仕方は眼醫が檢眼鏡を以て其度を調べて分つのであります又近視眼の性質にも種類がありまして近視の度が何時も同様で進まず停止いたしたると時々近視の度が高まり益物を接近せねば見えがたくなり進み行くものと常に間断なく近視の度が進行いたしまして止まぬものとあります、すべて近視の度が進みます時には光線に對してはまぶしく涙は流出で頭痛を來し眼筋の痛み等を發し眼の疲勞を感じます一層高度に近視度が

進むときは眼球に變化が參りまして視力が損害せられ色々々合症を來して大に危険なとがありますからして近視眼も不注意には決して置かれませぬ尋常近眼者の自覺の容貌を述べて見ますれば遠方を視れば不明で別ちがつかず學校にては黒板の文字を詳かに讀むとかく人に道に逢ふては禮を行はず家を訪ふて其記號標札を辨するをが六ヶ月を望めは朝月に見へ敵に遭ふて味方と誤る如き自由を來し不都合を生じます遠き處を望む際に常に臉裂を細くして視る僻ありて一見近眼者であるとは誰れにても看破せられます弱度の近視者は自身には近視あるとを知らずに居ますこれは遠方を見るに無論不明であるけれ雖他人も自身同様に不明であると思ひ居るからであります又近視者の中には遠方の物体が明でないのみならず重複して見ゆるもののがあります弓張月の兩端が幾つにも岐れて見ゆる如きです其他眼前に蚊の飛び廻はるやうなものを見るをもあります然し近眼者は近接す

るものは明細に見ゆるもので細字等を書するには得意であります强度の近視者が近業を不注意に營む時には意外の事が生じますまぶしく涙の流出たり視野の中に暗黒の點が生したり眼中電光の閃りめく如き感じ物体の變化して視ゆるなどは常のとてあるが眼は疾勞して業務を續くるとは出來らず外斜視となり又恐るべきは卒然に網膜か剝離して失明するに至るとかあります近視眼は如斯不幸の病症を來すともあれば單に遠望の不自由位には止まりませぬから眞面目に眼の衛生方法を研究しまして既に近視に罹り居る人の爲めには其近視の進行するを防ぎ健眼者は之れが豫防を致したいものであります而して衛生方法を知るには近視の原因を知らねばならぬ其原因は遺傳に基きて一家の族人が之れに罹るものは極めて罕でありまして通常眼の不衛生から來るのが多數であります初生兒は遠視で生れまして年齢が長するに従ひ正視眼となり學校に入りて漸と近視となるものが余程多數

で有ります實に文明の基礎である學校教育が近視を來す大原因であるといふとが大學者の説であります下等社會野蠻人中には近視眼は少なく小兒に近視の少ないと同様なる理由で近視の數が小學より中學に多く中學より大學に益増加して居る磅礴コン氏の検査に依ると小學校は百に付十四で中學は十六で大學は六十の割合で教育の隆盛なると共に近視はだん々増加する勢を示すそろです誠に遺憾千萬なとで教育の未だ完全ならざる證據だと思ひます我國も古より近視眼のあるは疑なきところで只今より少數で有たのでしょふは増加せること原因は一つの今日の如く繁多なる教育と一つは文字の形が古よりは小形になりたるは近視の増加する一原因でありますよみ願くは教育の局に當るもののは字形の改大と繁多の改良とに盡力せられんことを希望いたします、

近視の發生するには十三四歳より二十二三歳に至る春季運動期に最も盛であります婦人は男子よ

りも近視に陥り易く其強度も高度のものが多く男女共に同一の課程を授くるも近視は女子に多くて且つ強度だといふとです其理は恐らくは婦人は体质が男子よりも弱き爲であるとの説であります我が國男女學生に就て此比較を検査したるとのは知りませぬが他日比較調査を遂げた上は諸君に告白いたします金銀職工活字拾彫刻者等の接近して業界を營む職業者は近視眼が多くあります我が國の印板職工は古より凸鏡を用ゆるもの多きは甚嘉すべき近視豫防法で誠に敬服に堪へません近視の療法は活するとは専門醫も難しとするところにて近視は全治するとは出来ませぬ只其近視の進行を防ぎ強度にならざる方法と眼の衛生を十分に施し近視を豫防するとは出来ます近視の進行を防ぐ方法とは適當の眼鏡を用ゆるのでありますそれで近眼者は眼科専門醫に就きて眼鏡の精選を乞ひ其指示を擇手に擇手するとは不可ません、

眼鏡を適用する大略を少し申述置ます弱度の近視には遠方を見る時に矯正の眼鏡を用ゆるのであります近接の場合讀書時等の場合には必要がありませぬ中等度の近視には遠近兩用の眼鏡が入用です併し近用の眼鏡は適當の矯正眼鏡よりも少し弱度の眼鏡を用ゆるを良といたします強度の近眼には遠用近用の兩鏡は共に必要ですが矢張成可弱度の眼鏡を用ゐなければ久しく用ゆるに堪へませぬ強き近視眼で視力の衰へて居るものは眼鏡を用ゆるも遠見には其効がなく近業にははげしく眼の調節機を使役する嫌がありまして寧ろ鏡を用ゐない方が良しくあります只近用には止むを得ませぬから制限して用ゆるとです近視の進行中なる人は殊に夜間勉學執務するに當り眼邊に疼痛を發し眼が疲労し易きとがあります如斯時は速に一時業務を廢して醫の療法を受けねばなりませぬ健眼者も近業を以て常に從事する人は彼の彫刻職工の如くに眼鏡を用ひて執業し近視を防ぐへきです、

博士コン氏の近視の衛生的豫防法を左に掲げます
から教育に從事せらるゝ先生學生諸君はとうぞ御
熟考の上左法を行して教育の不完全を補ひ已人
に於ては近視の症に罹らぬをを希望いたします、
一光線は十分ならざるべからず暗黒なる校舎は一
切改良せざるべからず燈光は電氣燈と最良とす
是電燈は光強く空氣を不良にせず且熱を生するを
少ければ他の燈火に秀逸す、
二體勢は正からざるべからず頭を垂れ脊柱を屈む
れば眼と物と相接近し頭部逆上し眼は充血し易
し依て机は體に應し一定の高差なるべからず
三細字の書籍は皆不可なり教科書の活字は五號よ
り下るべからず可成字形の大なるとの可なり用
紙は白色又は稍黃色なるを良とす紙面の破れ易
く荒れ易きものは不可なり又光澤ある紙はすべ
て不良なり、
四教課と休息とは一定の分配を要す毎一時間に十
五分の休息を必要とす眼の調節機能の疲勞を安

するに足るのみならず身体上有益なり、
五學校教育と家庭教育との衛生的監察は同一の註
意を要す彼を嚴にし是を寛にするが如きあれば
決して効果を擧ぐるをなかるべし、以上

▲口に就て 口には二つの作用がある、飲食のためと言葉のためである、前者のための口は動物的であるから美感がない、響き醜を感ぜさせる後者のための叢は、内部精神を表現するので大に美感がある、此二つの作用を假りに醜的作用美的作用と名けよう、ソコで口を大小と分ける、中は程好いのであるから兎や角云ふことはない、口の大きいのは動物性の作用を大きく感じさせる、口が大きいと大食多言でもしさうに感ずる、此種の口は或種の英雄豪傑には適するが美人には適しない、口の小さいのは美的妨害をする動物醜的作用が弱く感じられる上に言著の表出作用も強く感じないが、目の小さい場合と同じく其内客を想像して美的快感を深く感じさせる、日本の美人畫の小さいのは餘程面白いことである口だけ離して見れば口とは受取れない程小さく形ちも自然の口の形とは違つてゐる、これは畫家が美人の畫を書くのに口の動物的作用を避けたのである、また言葉の表出機關としての必要をも感じなかつたのだ、精神内容に對する想像を惹き起させるのを主としたので、成るべく小さい口の必要を感じた小さい口は頗るの美を附け加へる利益もある

粘土細工に就て

藤五代策

子供が家庭で手遊びする事柄は色々あるけれども我思想を一つの形體として發表するに最も適當したものは粘土細工が最よいのです。蓋粘土は到る處にあらざるなく其適宜に練りたるものは極めて柔軟で取扱ひに少しも困難を感じず展縮自在に細工せらるゝから子供は非常なる興味を以て此の細工を迎ふるのである。次に粘土細工に付て取扱方を述べて見や。

一、粘土の性質

如何なる粘土が最細工に適當してゐるか餘り粘り過ぎて手指や籠に粘着するのは宜しくない。又餘り硬く過ぎて扁平なる部分や細き部分を作るに破裂を生ずるもの勿論適當でない。要は粘り過ぎず硬過ぎず取扱上に困難を感じぬ者が上等である。色には純白のもの灰白色のもの赤褐色の

ものなど種々あれどもそれは何れの色でも差支はない。斯る粘土は窯業地には多分得らるゝが其他の處にても古き田の底土など採りて試みば意外によき土を得らるゝのである。又場合によりては粘脆兩土を程よく練り交ぜ調合して造ることもある。粘りの少なき粘土には少しく鹽分を加ふれば粘くなるものである。

粘土は自然のまゝで使用し得る者が多いけども小砂などの夾羅物が混じて居る者は細目の篩で筛选するがよい。尚精撰せんには水飛法を行ふのである。水飛法とは乾燥せる粘土の粉末を水槽中に投じ程よく攪拌し其上に浮べる夾雜物は撈ひとり尚續けて攪拌するとときは小石は下部に沈澱し上部には泥水のみ浮遊して居るから之を静止して置くときは最上部より漸次に澄み行くのである。此のとき水のみを汲み出し晴天に乾かすときは上部に精撰せる粘土を得らるゝのである。

二、粘土細工用の工具

1 細工板

粘土は其まゝ机上や床の上には置かれないから別に細工板を一枚持せたい長さ六寸幅四寸厚さ二分位の木か杏の様な板ならば結構である之れは細工の際机上に置いて此の上にて細工するのである、

2 細工籠 篠は竹製のものにして一は鋤の如く一は棒状をなせり鋤籠は多く粘土を撫するに用ひ棒籠は細工品の表面に色々の摸様を描くのに用ひるのである、

3 濡布 一尺平方位の木綿切れを水に濡し粘土の硬化せざる様に包むに用ふるのである凡て粘土は細工を施す際に子供の手指の温度のために表面から次第に乾きて脆くなる者であるから常に濡布にて濡して細工せねばならぬ此の外濡布は細工板や手指を拭き又は籠先を濡すに必要なのである、

4 水槽 手指を洗ひ布を濡すためには水槽の用意

をせねばならぬ之れはバケツでも金盤でも適宜に水を入れて置けばよい、

三 粘土貯藏法

粘土は入用の度毎に練るのは面倒であるから始めに於て二三貫目ばかり適度に練りて貯藏して置くがよい其法は小形の甕を少し濕氣ある所に置き其の内に練製したる粘土を一塊となして貯藏し上より蓋を密閉して入用の度毎に適量を分ち採るのである若し粘土の乾き過ぐる憂かるときは上より霧水を吹きかけて湿すのである、

子供が或る細工を作りかけて中途にして止むときは其の半作品をば濡布によく包みて此の貯藏甕の内に納めて置けば表面の乾く憂がなく其の後直ちに工が施されるのである、

4 粘土の分配方 粘土を分つには細形の杓子にて入用丈つゝ押しきつて分くる者であるが若し多數の子供に分配するには一尺餘りの細き針金を左右の手に緊と支へて粘土の塊を針金にて引

切り分つのである、
五 粘土の糊 粘土の糊の普通の粘土を茶碗に入れ
て泥状になし此の泥を毛筆の先端に付けて細工
品を接合する時に糊として用ふるのである例へ
ば文鎮の棒と摘要とを接合する際には此の泥を
用ひて糊とするのである、

六、素焼きの仕方 粘土細工品は其儘にては甚脆
く且美觀を呈せざれども之を素焼し釉薬を施す
ときは堅固にして且美的に見ゆる者であるさて
此を素焼するには細工品を四五日陰にて乾かし
次に日光に當てよく乾かし内部に少しの水分
を含みてもならぬ少しでも水分があれば火に當
りて直に破壊するのである學校などでは焼窓を
備ふる必要があるけれども家庭では焜爐の火で
焼けば十分である、

其の法は先焜爐の内に始めは少しく火種を入れ
て其の中に細工品を投じ漸次に火力を煽し細工
品が全く火の色と同色になりたるときは既に十

分素焼の出來たる者にて未薄黑色を帶べる間は

素焼の出來ざる者と知らねばならぬ、
茲に一つ断りて置きたいのは火力にて直接焼け

はどうしても純白に焼けずに幾分か黒味を帶
ぶるから之を防ぐにはルツボの中にて焼けば黒

味を帶ぶることなく見事に焼けるのである、
次に素焼の上に釉薬を施すは稍困難であるから

家庭では素焼の上に粧粉を塗り其の上より適宜
の西洋繪の具を塗れば之れで澤山である勿論素
燒等の施し方は母の仕事である、

七、細工品の種（粘土は一貫目二十三錢神田區鉢

木町三十番地梅屋にあり）
口繪に掲げたのは兒童の常に目撃せるもの、一般
を擧げたのである此の外千種万態限りなし皆採り
て試みさせたいものである、



猿と人間

澤の舍主人

動物學者のいふところによれば、猿は人間の先祖と極めて近親であるとのことで、それからぬか常に彼の人真似といつて些細なことまで人間の真似をしたがるものである。人間が猿を捕獲するのに、常に彼の人真似する癖を利用するのである。

古來、日本に最も普通な捕獲法は毎年秋季に猿の子供がやうやく親の手を離れた頃、戸棚のやうに拵へた大きな箱を用意して、若い猿の徘徊して居りさうな山奥の深林に入つて待つて居る。愈々猿君の少年黨が向ひの枝などにチラと見ゆると、此方では例の箱の戸を押し開けて這入つて猿どもに、これ見よがしに、饅頭や御鮓などをふいしさうに食べながら、内から戸をビシャツと閉める、頓て又開けて外に出て、一寸休息し、復た這入つて、食べながら再び内から戸を閉づる、次で再び

戸を開けて外に出て、暫時休息する。といふやうな順序を幾度もくりかへす。始めの程は猿どもも不思議な顔付をして居るが暫くすると大層珍らしさうな様子で注目し始むる、もうよい時分と此方で見込がつくと、戸を開けたまゝで遙か隔つた他の場所へ出て行つてしまふ。さうすると、梢から瞰しつ、先刻來非常に好奇心に刺戟せられて居つた猿公達、今や幸に箱の持主が遠く去つたので、早速降りて來て、争つて箱の内に駆け込んで、其處に積みおかれた饅頭やお鮓を頬張つて試つゝ競うて戸にすがつて、ビシャンと締め切る扱こんどは開ける順番だと、細いながらも猿臂を伸ばして、引いて見る、これはしたり引いても突いても開かばこそ、開かぬ道理、樋が既に落ちて居る、猿公實にして能く真似るといへども、暗闇の箱の内、樋の落ちて居らうとは夢にも氣の付かう筈もない。キーワーいつて地團駄踏んで切歯扼腕慷慨悲憤して居る。

そこへ豫て彼方で窺つて居つた、箱の持主が歸り來つて箱の儘を肩にして大得意で旋凱といふ順序となる。

宅へ歸つて、戸を開けて内を覗いて見ると、中に猿君一人と思ひの外、二君あることもあり三公あることもある。斷念したのになると、所謂見ざる、聞かざる、言はざる、など捨つて居ることもあるさうである。之は實際の捕獲法である。

今一つ最も簡易な捕獲法がある、それは豫め懷中に入論和服の方が此際便利である。夥多の拳小の礫を梅ヶ谷のふ中のやうにふくる、まことに勿論和服の方が此際便利である。豫め懷中に入り込んで、刃のそりと例の山中に入込むのである。猿群が多數で此方は唯一人であると先方は勢を持んで人間を馬鹿にして嘲けるやうな態度を示す、それを此方が歯痒さうに殘念さうな振ふをして、豫て用意の礫を懷中から取出して、猿に向つて投げ付くる、勿論投げる石は猿公の居る梢に達しないことは此方も承知のこと、猿

公も亦安全界に居ることだから何の心配もないで、唯人間のする眞似をするのが面白さに、負けぬ氣を出して、己の懷中を揃まんで人に向つて投げ付くる。此際若し人が一々地上の石を拾つて投げ付けやうものなら却て猿公共に忽ち打殺されてしまふ何せなれば、彼等は下の二本の手で拾つて上の二本の手で投ぐるから、如何に上手な人間でも、此方から一個投ぐる間に彼方から二個は確に来る況して此方は一人・彼方は多人……多猿數、たまつた話でない見るゝ中に堂々たる人間様が一人陥落して終はなくてはならぬ。

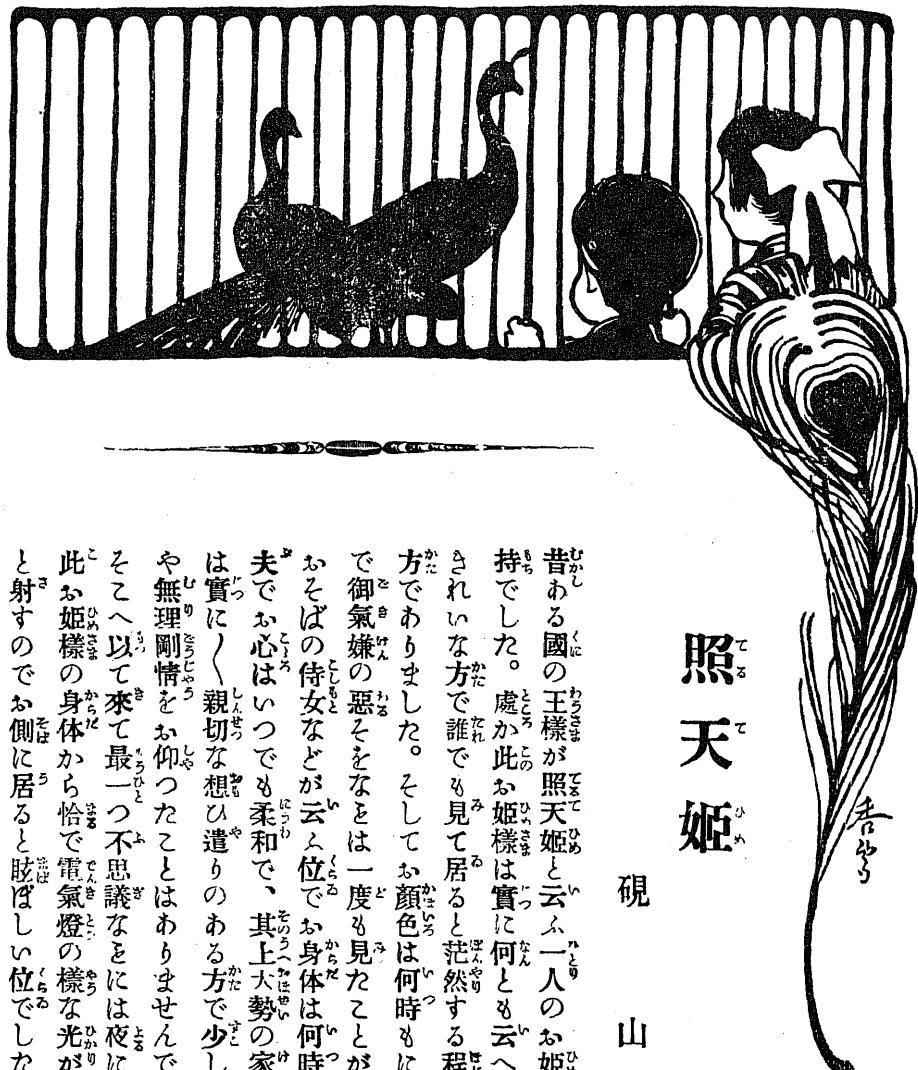
されども、そこは人間だ、そんな詰つた争はせぬ、唯飽くまでも豫て用意の懷中からのみ取出して投げ付くる。猿公共も益奮つて應戦する。併しこの方からの彈丸は石ばかりだが、彼方から飛んで居るのは腹の毛ばかり……下で人間が之を受ける設備をして、其良い毛を筆屋に、よからぬ分を座布團屋に賣るべく待ち設けて居る——腹の毛がな

くなると其次是續いて飛び散つて來るのは矢張石ならぬ腹の皮である、……大分痛むと見えてヨレでは居らぬ、……腹の皮がなくなりさうになつたと思ふ頃よりお中の道具まで落ちて來る、……下で之等を受くる設備をして、急速片付けて、皮は膠屋に道具は肥料商に賣るつもりをして居る、……萬端此方は用意の上のことだから益盛に石を投げ付くる、彼方も一生懸命、腹中全く空しくなるまで戦うところは流石に敵もさるものである。が到頭、目が舞うて、高い梢から健氣の猿公もバツタリ地上に落ちて、お頭を石に當てたら顔を歪めて往生し、おいどを木の株でうつたら笑ひながら成佛する。

其處で、此方は悠々として彼を拾つて歸るといふ便法である、費用も要らねば道具もいらぬ。而かも澤山礫投げの練習をしたから、歸つて來てからベースボールのビッチャなどには持つて來といふエラものになり得るといふことである。

我輩は學者の一人である。苟くも學者たるもの主張をなすには根據がなくてはならぬ。さういふところから、後に述べた捕獲法はチット少しうやしいので、どうも信用を十二分にはかけないのである。實際我輩の嘗て居つた學校に澎湖島産の小猿公一匹を飼つて居つたから、それに就いて二ヶ年間引つゝき實驗をして見たが昔の猿公は兎に角、今の猿は子供でも、ツマラない競争などには勝たなくともよろしいといはねばかりの態度をとつて、決して自分で自分の腹の毛をむしつたり皮をちぎつたりして投げ付くるやうな、その昔、長條城主のやうなことをしなかつた、故人先輩の説を輕々しく否定するのは後進として往々生意氣の嫌はあるが實驗上からどうも少し大分うやしい說だと後の方を思ふ。

が一般に、諺にも猿の人真似、猿智恵などいつて、一寸したとにでも、よく小賢振つて、ホンの上滑りの眞似をして、飛んでもない滑稽や失敗を仕出かすことの多いのは、猿の通性である、人間にも之を他事に思つてはならぬものも稀にはあるやうである。



照天姫

吉原

硯山

昔ある國の王様が照天姫と云ふ一人のお姫様をお持でした。處か此お姫様は實に何とも云へない程されいな方で誰でも見て居ると茫然する程立派な方でありました。そしてお顔色は何時もにこやかで御氣嫌の悪そをなすは一度も見たことがないとこそばの侍女などが云ふ位でお身體は何時も御丈夫で、お心はいつでも柔軟で、其上大勢の家來達には實にく親切な想ひ遣りのあの方で少しも我儘や無理剛情を仰つたことはありませんでした。そこへ以て来て最一つ不思議なをには夜になると此お姫様の身体から恰で電氣燈の様な光がぱあつと射すのでお側に居ると眩ましい位でした。それ

故此御姫様が御生れになつてからは御殿中の電氣燈は皆御廢止になりました。殊に近頃はお姫様が毎晩お殿のお屋根にお上りなさるので國中は恰で晝間の様に明くなりますが、何處の家でも燈火をつけることを止しました。王様は此様な可愛らしいお姫様をお持なすつたので何時も御自慢でしたが、そを善いことばかりは續かぬもので王様はだんく御年を召しますのに未だふ世繼になる皇子が一人もありませんでした。それで遂に或年の事王様は方々の國々へ御布令を出して何んでも此王様の仕ろと云ふことを三度したらば其人に此お姫様を遣つてそして此國の王様にすると仰せられました。そこで來るは方々の國から小利口な青年が續々と遣つて来て我こそ此姫様のお婿様になつて王様の位に昇らうと思ひ込んで幾人となく遣つて來ました。處が此王様の國へ行くには大き山を三つと大きな川を三つ越なければ何うしても行かれず其山には澤山の虎や澤山の

蛇が住んで居て大抵の人は食はれてしましますし川には大きな鰐鮫が泳いで居て大抵な舟は轉覆返してしまいますので逆も容易には行かれませんたまには大骨折で行く人があつても今度は王様の御仰せが逆も並の人間に出来ることでないので誰れも閉口して仕舞いました。

處が此國から大分離れた西の方の國の王様の所に一人の利口な皇子がありました。此皇子も何うかして彼のお姫様を貰ひたいものだと色々考へた末遂に出掛けることしましてお父様にお願いするとお父様は「お前が何うしても行つて見たいと云ふならば行つてもよいが其代り遣り損つて歸へつて來ても家へは入れないが夫れでもよいかね」と云はれましたので流石の皇子も暫し考へて居ましたが頓がてきつぱりと

「お父様私きつと遣り遂げて來ます。若し出來なかつたならば死ぬ迄も歸りません」

と申し上げたのでお父様は御許しになりました。そして御父様の大事な丈夫な馬を下さいました。そして御辨當には母様がおいしいサンドウイチを造しらへて下さいました。皇子は此馬に乗つてお辨當を持つて段々と東の方に遣つて来ますと、太陽がキラキラと照り付けるので暑くて汗はだく／＼垂れし喉は喝いて堪りません。漸くの事で、とある森の處に参りますと皇子はヒラリと馬から下りて側らの木に之を繋いて草を食はせながら休ませて置き自分も一休みしました。それから大分お腹がすきましたので母様のこしらへて下さつたお辨當を出して食べ様と思つて先づ布呂敷を解き込み紙を退けて中を見るとおいしそうなパンの上に一匹の赤蟻が匍つて居ました。平常から情深い皇子は之を見て

「ヤア蟻君、君もパンが好きかね、それぢやあ、其は君に進上しやう」と云ひながら上の一つを退けて側に置いて其下のを見ると生憎之にも赤蟻

が居ました。然も今度は二匹居ました。皇子は「フヤ／＼茲にもお居でか仕方がない是も君達に上げ様と」云つて又側に取り退けて、傍て今度は愈自分が食べ様と思つて下を見ると之にも父赤蟻が然もだん／＼殖えて三四匹居ます、是には皇子もがつかりして

「エー仕方がない。蟻さんもひもじいだらう皆上げやう、遠慮なく、お食べ」と云つたまゝ側の方に處が此三匹の赤蟻の中の一匹は蟻の王様であつたものですから大層此皇子の情深いのに感心して寝て居る皇子の耳の傍に匍つて来て

「若様、今日は有りがたう御座いました。お蔭様で大層甘い御馳走を頂きました、私は赤蟻の王様で御座います、今日の御禮に此後何か御用が御座いましたらば致しますから其時は赤蟻の王様と三度御呼び下さい」と云ひましたが皇子

は眠むかつたので碌に返事もしませんでした。其中に日も追々蔭つて來て暑さも幾分減つて來ましたから皇子は

「ドレ出掛け様か一と云ひながら起き上つて着物の塵を拂ひ馬に乗つて又も東の方へと進んで来ました。スルト

頓ての事に例の恐い虎のある大きな山にさし掛りました。

強つい皇子も少し薄氣味悪く思ひながら

山奥深く來ますと其處に一つの湖がありました。

皇子は何氣なしに此傍を通つて行かうとすると道

の傍の草叢の中から何んだか恐ろしい鳴り聲が聞えます。

ソート窺いて見ると一匹の大虎が大きな岩に前足を挿まれて抜くことが出来ず足からは血

が出て苦しんで居る所です。皇子は是を見て

「ア、いあんばいだ此間に早く逃げ様」と思つて馬を急がせて五六間行きましたが、根が情

深い皇子は虎の苦しそをな喰り聲を聞いて又も馬を止めて考へました。そして

「ア、矢張り可哀そをだ、ナニ若し飛び掛つて來たら此劍で突き殺して遣らう、若しこれなからラビストルもあるからい、やと云ひながら馬を返して先きの所へ来てヒラリと馬から下り平氣で虎の傍を通して大な岩の後に回つて其大岩を動かして見ましたが中々動きません。何か棒はないかと見回はすと向ふの方に大きな丸太が一本ありました。之を持つて來て漸々のことで大きな岩を少し持ち上げて虎の前足を離して遣りました。岩から離れた虎は直にも皇子に飛び掛るかと思ひの外虎は然も嬉しそをに痛い前足を引き摺りながら皇子の傍に來てふ辭義をして「若様誠に何うも有りがたう御座いました。お蔭ありましたら何うか虎の王」とお仰つて下さいまし然をすれば私は直に出掛けて行つて御恩

と云つて何處かへ行つてしましました。それから

皇子は此山を越えて今度は大きな川を渡らうとしますと此川には舟がありません。おまけに水の中には鰐鮫が住んで居て逆も游いで渡れません。仕方がありませんから側の大木を伐り倒して腰の剣を抜いて此木を削つて丸木舟を造つてやつとのことで之を水に浮べてイザ渡らうとしますと何處から來たのか穢ない着物を着て穢ない布呂敷包みを持った顔のこはい一人の乞食が出て来ましたのです。

「オ、若様御情で御座います何うぞ私も連れて行つて下さいまし此間から向へ渡れずに困つて居たのです。」

と頼みましたので皇子は別段嫌な顔もせず、「ソーカそれぢや一所に載せて上げやう、早く御乗り。」

と心よく乗せて愈大川の中へ漕ぎ出ました。スルト彼方から此方から大きな鰐鮫がウヨウヨ遣て來ました。そして舟の傍へ来ては暴れたり舟

の下をくづたりするので丸木舟は今にも轉覆返りそをです。是れを見た乞食は唯ア、アと云つてる許りでブル／＼震へ上つて遂には漕ぐことも出来ず眞青になつて寝てしましました。皇子は一人で鰐を逐ひ拂つたり舟を漕いだりして漸くのことで向ひ岸につきましたが陸へ上つた時には最う腕も何も折れそをになつてしましました。乞食のお爺さんも漸く起き上つて來て

「若様、何うも有りがたう御座いました、私は何とも禮するものがありませんが、此處は此布呂敷の中に小さい壺があります。是をお禮の印に差上げませう」

と云つて出しましたのを見るに誠に美麗な小さな壺でした。皇子は欲しくもないと云ふ風で見て居ると乞食のお爺さんは

「若様、あなたお腹がふすきでせう。私が唯今御馳走致しませう。」

と云ひながら此壺を両手で持ち上げて

「壺よく有り難き壺よ、一人のお辨當の出ますやうに」

「云つて此壺を皇子の前に下しました。

スルト壺の中には何時の間に何處から入れたかぬかしそをな御馳走がちやんと入つて居ましたので皇子も喫驚してお爺さんにお禮を云ひながら二人でふ飯を食べました。食べながら色々なお話をしで皇子は東の國に照天姫を貴びに行くのだと話しますと乞食は

「そをですか夫れは大變な御奮發ですね、夫れぢやよいことを教へて上げませう是から少し行くと左り側に大きな森があります。其中に眠り仙人と仙人が竹の寝臺の上に寝て居ますから其處へ行つてあなたの馬を預けて其仙人の乗つて寝臺を借りて其へ乗つて御出なさい、然すれば直に照天姫の國へ行かれます」

と教へて呉れました。そこで皇子は馬に乗つて又みだんく行きますと成程左り手に大きな森があへて呉れました、皇子は喜んで馬を預けて寝臺の

りました。森中へ入つて見ますと遙か向ふの方の大木の根株に一人の仙人が寝臺に乘つて寝て居ました。皇子は馬から下りて仙人の傍に行き暫く

待て居ますと頓がて仙人は眼を覺ましてあたりキヨロ／＼見廻はして居まから皇子は此處ぞと先づ

御辭義をして

「私は是から東の國へ照天姫を貴びに行くもので御座います。承ればあなたの寝臺は大層便利なものだそを御座いますが何うか少し拜借することは出来ますまいか其代り私の馬を御預けして参ります」と云ふと仙人は默然として皇子の頭の先から足の先迄見て居ました、そして頓がての事に

「ウーお前さんなら嘘も吐くまい。必と返して呉れるだらう、宜しい大切な寶だけれど貸して上げやう

と云つて貸して呉れました。そして其使ひ方迄教へて呉れました、皇子は喜んで馬を預けて寝臺の

上へ乗つて、口の中へ
「寝臺よ／＼有り難き寝臺よ、是から東の國の玉
様の御殿へ行け

と云ひますとガタ／＼と云ふ音と共に寝臺はフー
ツと空天に舞ひ上つて風を切つて飛んで行つて忽
ちバタと地面に落ちました、見ると前には王様の
御殿があります、けれど夜の事で門が閉まつて居
て開きません。仕方がありませんから寝臺の上で
寝て居ると其中に東が白らんで夜が明けて来まし
たので役人も起き出し御城の御門も明きました。
そこで皇子は門番の處へ行つて西の國の皇子だが
ふ姫を貰ひに來ましたと云ひますと早速王様へ
申上げる王様は「うるさい若者がまた來たか」と
仰しやりながら若者を呼び出して御覽になつて
「お前か、西の國から來たのは、然うか、夫れで
は今此處に三つの仕事があるが之をすつかり仕
遂げれば此國の王にするが然もなくば姫を遣る
譯には行かぬ。三つの中の先づ第一は此處に百

斤の芥子の實がある、此芥子の實から油を今夜
の中に取つてしまつて呉れ」とおつしやいました。
た。

皇子は王様の前を下がつて外へ出ましたが何うも
今夜一晩に芥子の實から油を取つしまることは出
来ない何うしたらよからうと思つて居るとフト氣
が付いたのは蟻のことです、皇子は

「ア、そそだ蟻に相談しやう、そしたら何とか
工夫が出来るだらう、赤蟻王々々々」と三度呼びますと一匹の大赤蟻が皇子の足許に出
て来て

「ヲ、若様、私は此處に居ります、若様の足許に
居りますよ、何か御用でも出来ましたか、大層
御心配の御様子ですか」と云ひました、

皇子は心配と云ふのは斯う云ふ譯だと話しますと
蟻は

「ア、そんなことですか、宜う御座いますか
なさい私が明日の朝迄にすつかり王様の云ふ通

りにして参りませう」と云ひますので皇子は百

と手を拍つて

四四

「ア、そぞだ／＼なぜ早く氣が着かなかつたらう虎の王！」

々々々一、と云ひますと向ふの方から

ラウチー／＼と唸りながら此間の虎が出て来ま

した。皇子が何か頻りと考へて居るのを見て

「若様、今日は御機嫌宜しう、唯今は御呼びにな

りましたのはあなた様で御座いますか何んぞ御

用で、大層何か御考へですなと云ひました。

「ヲ、虎かお前に少し頼みたいことが夫れは外で
もないあそこの王様の城の隅にある岩屋の中に
二匹の化物が居るがあれをお前に殺すことが出

來様か」と云ひますと虎は

「夫れは譯はないことです早速行つ付けませう」

と云つて友達の虎を一匹誘つて来て忽ち食ひ殺し

てしましました。翌朝王様は之を見て更に第三の

間を御出しなさいました。夫れは斯う云ふのです

此い城の家根の上の中空に人の目に見えぬ高さの

處に一つの大太鼓が掛けてあるから是れを叩いて

斤の芥子を皆んな蟻に渡すと蟻は見る間に何千匹だから何万匹だか判らない位な大勢の家来を集めて見る間に芥子の油を皆抜いてしまひましたそこで皇子は翌朝之を王様に差上げると王様も嬉んでは是で宜しい」と云つて今度は第二の問を御出しになりました。夫れは此王様が先達つて狩をなさつた時に山から捕まへて入らしつた化物が二匹岩屋の中に閉ぢ込められてありました。此物は不思議な魔法を使ふので人間には何うしても殺すことが出来ません。之を退治して來いとお仰しやるのです、皇子は亦外へ出てから

「外の人間にも退治られないものを私に退治ると云つた所で同じことだが、はて何うしたものかイツソ遣り損ふ迄も其化物と戦つて見やうからイヤ／＼私だつて人間だから矢張りだめだらうはて愈困つたかな」と一入考へて居た時に又氣が就いたのは彼の虎のことです。皇子ははた

「寝臺ねだいよ々々々有りがたき寝臺ねだいは是から中空なかうの太鼓太鼓の所ところへ行け」と云ひますと寝臺ねだいはガタ／＼フリット飛び上あがつて忽たちまち太鼓太鼓の所ところに参りました。皇子は早速持つて居て剣の鞘さやで繋つないだと力一ぱい太鼓太鼓を叩たたきましたので下したでは此國このくにの人々何事が起つたのかと思つて皆外ほかへ出て不思議ふしきぎがつて空そらを見上げて居ました。

皇子は暫時さんじの間叩たたいて居ましたが時分じぶんはよしと思ふ頃頃降りて來きて王様わうさまの前まへへ出て來きました。是れで三つの問もすつかり出來できましたので王様わうさまは大層おほぶ御喜ごきびになつて、お姫様ひめさまを下くだされそして此國このくにの王様わうさまにすることに致しました。皇子は漸くさうのことで思ひを遂とげたので一と先まへお姫様ひめさまを連れてお父様とうさまの國くにへ歸かへり夫あらわから改めて此國このくにの王様わうさまになりました。

めでたし~~~~~



第二十七回産科

婦人科學講習

科目

產科手術學及婦人科診斷學

時日

十月一日より十一月三十日まで

資格

醫術開業免狀所有者

右廣告す

規則書御望みの人は郵稅金二錢御送り

のこと

東京市日本橋區濱町三丁目七番地

產科 楠田病院教室
婦人科

フレーベル會規則

- 第一條 本會ハ幼兒保育ノ改良發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス
第二條 本會ハフレーベル會ト稱シ東京ニ置ク
第三條 會員タラントスルモノハ幼稚園ニ關係アルモノ又ハ幼兒保育ニ篤志ナルモノシテ會員ノ紹介ヲ經ベシ
第四條 會員ハ本會ノ經費トシテ一ヶ月金拾錢ヲ醵出スベシ
第五條 令聞名望アル人ニシテ本會ノ事業ニ裨益アリト認ムルモノハ特ニ請ヒテ客員トナスコトアルベシ
第六條 本會ノ目的ヲ達セんガ爲ニ左ノ事業ヲ行フ
一、總會 每年四月二十一日之ヲ開キ保育ニ關スル演說、談話、
二、保育參列品幼兒成績物展覽會 倉庫ノ報告、幹事ノ選舉等ヲ
ナス會日ハ會長ノ意見ニヨリ之ヲ變更スルコトアルベシ
一、常會 每年二月、六月、十月、十二月ノ第一土曜日之ヲ開キ
二、保育ニ關スル演說、談話、協議、實驗等ヲナス
一、組合會 會員中特ニ或ル事項ヲ研究セントスル者ヲ以テ組織ス但シ別ニ組合會規約ヲ定メテ會長ノ承認ヲ經ルモノトス
一、雜誌發行、毎月一回雜誌ヲ刊行シ之ヲ會員ニ配布ス
一、前項ノ外本會ノ目的ニ裨益アリト認メタル事件
第七條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク
一、會長 主幹幹長一人 會務ヲ總理ス
二、幹事 十一人 會長ヲ補佐シテ會務ヲ掌理人
三、評議員 若干人 會長ノ指受ケ會務ヲ分掌ス
第八條 會長ハ客員中ヨリ推薦スルモノトス
第九條 主幹ハ會長ノ特選トス
第十條 幹事ハ會員ノ互選トシ其任期ヲ二ヶ年トス
但シ 每年半數ヲ改選スルモノトス
第十一條 評議員ハ會長ノ特選トス
第十二條 本會ハ必要ニ應シ特ニ委員ヲ設ケ又ハ書記ヲ雇入ル、コトアルベシ
第十三條 此規則ハ會員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレバ變更スルコトヲ得ス

(行發日五回一月毎) 可認物便郵種三第日八廿月一年四十三治明
婦人と子も第十七卷第十號

フレーベル會發行

幼稚園遊戲

定價金四拾錢 郵稅四錢
會員特價參拾錢

幼稚園の爲めに編纂され幼稚園の
爲めに出版されたものは本書が始め
てあります。世の幼稚園に關係せ
らるゝ方々は是非一本を産右に備へ
られんことを望みます。

尙本書には女子高等師範學校内にて
作られた幼兒用唱歌の歌曲並に同校
附屬幼稚園に於て現今採用せらるゝ
保育要項とを附錄として採錄致しま
した。

フレーベル會發行

幼兒談話材料

定價金四十錢 郵稅四錢
會員特價參拾錢

世に行はれて居る多くのお伽話は
幼兒教育に不適當なものであります。
本書の内容は特に幼兒の爲めに作ら
れたもので幼稚園時代の幼兒に最も
適當なものを集めてあります。家庭
間の贈物などには最も妙なるのみな
らず、苟も幼兒教育に關係して居る
方は是を標準として作話せられんこ
とを希望致します。